市井雜談

漫筆

和書門
類 二
號 一八八
函 一二九
架 三
冊

内閣文庫
和書
類 二
號 一八八
冊 三
函 一二一
架 五
(三才)

内閣文庫
番號 和 18802
冊數 3 (3)
函號 211 88

国立公文書館
National Archives of Japan

市井雜談集卷之下

三河吉田　林自見正森輯

○諸宗法華教人連俳の徒慰ミ洲て法華ミ宗ふるゆ家伝のまも洲
あ洲なれ宗実ふ中宗名と洲ふる事ふ全蓮八
法方ふあ事と洲ふ海吉の風ふ洲州表渡彩
珠彩ふの所のふと法海ふ方諸八実名ふ洲全蓮八虚表也白璧
天洲本ふ右ふ教ふ文義朝ふ怯弱と嘲り刺し教し
たふふあふ嘲ふて自宗ふ小所ふ玉造ふ所の事なると
ふ河ふ小河ふ事ふ事ふ教光文ふ有ふ或ふ法光守表緒ふ
一の宗ふて戦死ふ自宗ふ祖ふ事ふ法ふ事ふ教ふ法ふ法ふ教ふ

次信を討ゝし最後の敵誅へと掛て海に没し給ふの事と記
せる原に後の世の者の為にとて紀伊国の人とも言へば
是に源氏の子孫なりと云ふ有之ども云ひ或は平家滅亡と云
雖此に載せ置とも云ふ

○大学能に撥治判官と書のさよと云と言ふ師也一向敵
書の事と云ふ所にて是の事うと習たると有ける事也と
金剛三昧院に有之石に源敵のうちに師也と我すと云石有之
氏直義千に右田兵衛好松阿波の名ある敵人と共に海に
石有也し陸敵事の中源也と敵戦せたりと云ふ

○義経上板出陣の時湖の及ひ歴々にて右田道灌と云ふ

海を渡て立置て湖院に虚たる分と注進法華経
誦之時乃灌曰此度に敵に成ると
ともこれと知まうと云
さてくるとくなるとの演者也湖の法華と云
○横別当の所領に薩摩守忠度の在所あり
御所あり
今もたくのものとなりに残る石の苔に成ると有
○むし桃原源宮京寺大職の拵黒に汚れ
有て立海に遊ばして刀と云
刀と途中まで拵て汚れ

もてくとてさるもの力と云るハおこりあるやうのはんるん
京摩途中ふて見と云れ先立の命もとられて
切とみとて立てあ有ふ浦ふ人ハのこしさしの色りう
○中興京都の某が娘入聟と白るふ御の事わつてき聟京
出せ〜時娘
はて〜つまゝ人ゝ来るハちとうあくさるん素ハ表ふ出ぬ有るゆと
山源よりて再孫あり〜と云
○岡下縄の出岡浦浪又の娘秀歌と孫し達御書新
其後の出るこゞけて為る事とまこうふなりて出る娘
御所より

下縄の出岡ゞ浦ふまとうるのあるこハ浦ゞ〜るん
○長濱る未氏ゞ娘
上郡ふ堂屋はきのゆるゆ衣秋ちるひのるふ乳きて
山源ふよりて樽屋の問結と呼ふとうや
○京級雲と云る源素主を州姫ん坂出て
天花のいつまとうんん雲の上ふ表て秋る不二の位る
○津藩理織田信長の結女つ〜女う源と初ちたる〜云山つ〜共ハ
素子月の女るつ〜云まゆるの娘主方へ孫ゞ〜小文ひとう〜云
主家と出ん〜云主附つ〜女
とふ奥ふ打つてものたらひめ〜と恨る中て出るせり

かくてそ事とやみて出ぬ人也

○淨願寺文句の流儀に京都と紅梅殿と云共名人也は者の流
より世間一流に上方淨願寺と高る事ならんさ者享保後
年に死せ絶せて世に称せ

それ絶世去程物もそ後に残る様なれ匂ひ
物ならはいかもおろか埋火の消ぬま虚空なる新床哉

○太閤公の北国軍に素熟源三位殿改る金吾と奉称し
宇治の橋とられ一条寺院に入て戒と息ふ子家宇治川と流
て出に向の岸に多く新改の兵り端に付て戦ひ忽敗北せと
是全く軍法に不別る故也奈何とのれ敗ぬと決ぬる敵兵ハ

皆合渡りに入て湖岸に着一歩も可退所に敗に命と奉捨り
比て競むそれと防ぐんとすれども朋輩防ぎ止む程さ那河より
上り陸物とゆるめ出をく去て戦に附ハ勝利と云事もあるし
強ハ英名と国に向の石国を脱し出るを見に抑て不止て都て
此方の石に敗こそ国てそ在と出を〳〵に強こけて国に止る事も
あるべし強ハ宇治川の敗に多物に出物と云ハ新改に軍法
不混煉に国にそ云横の宇新改の流儀に違たる軍法に変と
可混後代に多て武田信玄と云て軍法の標準とし敗に軍法
に於ては如人も武田家と親矩とそと云て上杉謙信北源氏
康元利元就皆右に注若ハ機を知義家貞任と対て上洛し

朝廷ふて軍の法を犯すと濫觴も法に余て勇功と称せらるゝ大に
匡房側に在て聞之に勇名の事実に勇也軍法に背り法を
犯も同しく軍立を不知ふて法に勝に偏中なりと云
義家に比之匡房の能に奥に弱に同しく也に匡房に屋て軍
学の事をなり後年家衡を討滅したる也
○頼義秀衡法士に向て法を問と浮世に法士答曰
源廷尉義綱一の長に鴻の武功と称し名を世に謳歌に秀衡曰
義綱に比べ勇力をもつて身威儀に法に帥の器に非ず
如何とのれ接州渡船に乗て桃原に逢檜の海とそらるゝ
義綱に対朝の世校に弟に孫史軍の都督にして桃原に戦

者なんどのるを云ふ也海に我を威名に風
実称せるに比らんや但古より功の卓軍なる我と相対の
法をとるも対朝に源家の婿たれ功とせり陽我に匹まとり
て急に朱縷のごく父系たる天下をとゝ〳〵く討靡て今は海
と雲を掠を法を帝ゲ功に対朝に石橋たる慢せ斯て
法士に曰近代武田信義と上杉謙信と軍戈に於て英傑なる
なるを云秀衡曰彼を人早世にして海をそも渠と靡を
るとの也渠なる當時上京たるに帝ら馬糞の辛たる戒に我に
敵対する也のに彩鼠と為べし云法に世せに渠を幸
なるを云時に法士左右の咽喉に秀衡公忠を曰海を帝

ら治と荒涼なるとんぶ治を懐る面目なるとて胴張なると
出て睡眠らる時小光中列座なりて曰公の功績なるとて支面
く親戚んぶの義なるべく推らんぶ中小梅一ト枝を寒小公
の流派のとと言へあるも時秀長面色解散と立真小入り者也
○誰者秀長云播州三木城を割所小二島と攻んとの時別所
ら家臣中村立助在りかと流れ一ると秀長小敵せ秀長中村
ら和図小よりて三木の城と攻らる中村秀長と城中小入り都て
秀長と攻む秀長小物小て敵めて後去る戦没と自分ハ
潮虎口と飛込て姫路小攻除ると事と成ると平後三木の
城没落の後辛賞とんて中村と捜おるとんと趙方ら

後年小田原落城の後伐城小義居ると捕へ秀長小敵に
秀長中村と座上小引居て謂て曰汝孫罷小可行如何と一ると
小答へたる小別ら高小大なる石居を一んと改ざれとなて助
命せるとも剃髪三千石賜て中村式部小補ら与力小属らるも
○筒井順眼伝長同時の人也順眼辛に二年の間を辛と語
木阿弥と云目人順眼ら所作貴者部法仙ると故暗さ不を給
他ら敵方の云ふ兵財とるさしむ二年の後順眼死と報
あれば木阿弥本中の盲人とるるとて居もて居もう元へ戻る
とと元の木阿弥と謂ハせり
○文禄五年閏七月大地震と逢て不止伏見の城法門櫓悉く

例と城中の侍婢大癖壁死と當時金卒小求めかくさふとして
秀吉の命として京都諸京伏見檀木所手和倡家の妓女
とを以て伯婢くるの〳〵たる色家小秀吉の好子関白秀次
数度あり有石田三成澄奏と秀吉手傳にと伝ど秀吉を
そる那小ふもせ出寵手有〳〵もとりと世人伝〳〵入〳〵石田が澄奏
ふようての事小あり〳〵秀次昊禁して強更逆あり事
澄摂多澄也手逆人の数を小秀吉の実子成出小秀吉
秀頼と童寵事〳〵且又秀次澄好の妻の〳〵有之ずして
秀吉関〳〵秀次と疎られ〳〵好〳〵秀次の近臣秀次向
て曰人〳〵秀吉秀頼と寵事もせ〳〵事新殺小澄〳〵天下小

秀頼の有たるん事を計器家事也と書〳〵秀
次、漂殺と勧め澄〳〵秀次荷小逆の企なり〳〵と雖も商
秀吉京小対し敵対謀小ふんして種〳〵孫計と思もなり京
近小ひひる石川兵部と云授構者の倫也なりし去京都
人大坂の城内小紛入て法士の佩刀と摸造手和澄殺手
なり〳〵或時菊亭右大臣晴季ようり秀次の使者と力背し
手婚姻と大集ひ有る事和
たる右府後も秀次彼と情大間と害せん事と謂る事
を要ふめて〳〵出月之而後秀次謂て曰秀吉の愛所を
澄の寵炉とそなるあり出者妙薬中怪者也ひ入ひ音

と出んとする仮出之出び入がくし徐として風風と鐵砲ち
芸濃の間の浦と云そこれと色い者と出を事なし手柳
なくして出び入りと云所に秀吉公、濃州
たる風風秋の浦わを美女ありて大ふりして手柳
と立たつよくらまよりつ伏人の掘まのび入らず不
藤の長柄の長柄ふりて長と長道家にはしは千石の
者物と究れて出んとし時に信長殿人外者人とよび
長兵衛人跡先て立つと組立つ長兵衛人と膝に抜く
格闘より抱を抜る人たちり揺して揺揺ち立
組打ち穿鑿をうく組負一波浦と指出る事と秀吉

不審にて立つと立上、戦長、自宮中に於て腹切せ
る立つ陳に曰長に先を秀次の家庫に盗これを
云信を長兵衛て新人とれを秀吉も信く報道の
北面武士一言に出家と命せ切腹と命
金人斬首せる首と埋て玄田中塚と号一宇と建て玄田山寺
と号と今京都寺町に有と伝て長州人今部
の者出なるつ氏実宰彦し織田信長に語る信長興後秀
長の子裏に入る天下無双の名也成信云長つ揺ら時極
家一小姓つ長也斬て立つ詮議の上種兵衛に長
京都七条河原に於て人生数の刑罪に沒れ也

○宿者後白河院御落飾の時源三位頼政の孫頼茂と称る者
激しく流罪して深せらるゝ一族宗重も捕へられ流刑罪の打首
親鸞上人なりかゝるあひ宗重夜と忍せ給へる此者
如報寺小坂事

○楠正義者楠先祖と相別住居に於て舎弟の時光兵家臣
宇賀六郎戦没に六郎が子熊王丸と云幼稚なる正義に父と
ましの仇を討せんと正義を浮世の外の乗馬
あるを自僧を欲く正義涙く義懐一我涙に召拘て年弱て熊
王丸腹を正義懐を一一数の間和田和田と熊王鳥帽子
親をして名と和田に命正寛と名乗て右野度分賜を

たる環小所に入て熊王正義の恩恵の篤き小
感涙一大音あをて涙流し姫孫の事と正義小語て即法師
と截て正寛法師と号し浅瀬の住院小入て生て安養と事心せり
○中葉上州宰中近の与平治と云仕の仕邪曽基の者
ヲ一ら或時信州より府へ出る途と軽井沢を通り同途一人
法と云て小波信人を子と懐中せ一と云て忽狂と和田信
と教宗一人を奪ひ取て小南なる一お慈
小波世に成て書とむ云男子と成く与平治を子と懐抱
ら事波一子を出家の時痛と炙て小文婦矣代小者病を或故
と子法を兒と懐き居眼を張たれば法文の法眼と云事を乎

手足と脾腹て先〇萬坂小ての苛仕様覚くあり中くいつ子
手に徹と通さ伐見と云く扱て蹋殺し恵小家と出奔し
繋と切て法刑と巡廻に先〇を刑新張後海あく山有る
一夜日暮毎の河世始末と懺悔如何せしと子斬死も
○羽州山形家上家没家後家老魁延誠和八徳州古河小色
て古井家小奉度し千石と賜小伐後の士九人有り
暮上と立退く宗十人余し合せ熟如共先小奉公小あり
りる云ふの士と抱置る者扨も誠お先古井家小来る
有り九人誠お方へ引取て命抱も誠お元来臭実小て云歌な
る云ふ家の源と十小割百石ばく与く我才も因るると伐も後

法士名家八誠おら居僕国おこなつて法用と云し行ると也後
小誠お八世不把る故辛後継子国て後九人の士誠おご高り
一寺と建立し魁延寺と号し後刑古河小ありと云
○何年も古き世のことなれども実さる事でし若の
人八に小誠と元と云て古き実の事と奪亦の也ある
て後年なく学ふ古も能八多て検も又中く以下片田今の云の
ここに小多事世学の云も学し後世文元と云ふと云る云
つて墨絵なるなく亦しかしの一向の云事の族も稽小
云て已くがお毎の因年八矢ぶる者なり皮むし陸奥小あ
ふし瑞本も文の部ふ小ひの切なると本小ふと人臣とで後

世ニ多クテハ文ニテんたと迷ルガ故ニ孫末社のまづるき事ヲ
不用ナレトモ文トいつるものハ官文花ニよるガ故ニ迷るとひ
と不二の燈ニたとへ迷ひたる人を眼と源を海ニたとへたる花を
当ニ比して実ヲ以て論ズ京師際官者殿祭文構の社も源ニ出
る世ニかつて入らず後世の高ニ没ル事ハ唐漢ニ
淵源の末といつるものと云ベシ乃ち邪曲と所ハ出るとおもふるてハ
天子自叡覧有しと云ヒそれも今ハいう所ハ碧ヒりん淵源
の末のゆたもなを然ハ也所匝と云と出一ヒ世ら是ニ
の所上ニ不達して流滞の結あらん事と憂ふあつての事也と
そ云所匝と鉛筆と乳又ハ匝とも事ニハ元来誤解と別也

と納て出ざるヲニハ有ラ云ハたる為ニて也所の事他なるつふん高乃
匝也と云可謂雖有ニ改也と
○京海ハ元京ニ侯と云所ニいつの神ヲの先会として有ヒ山海経
六人の神ヲ皮係ニ出るとて云所ニ於て生贄ニ捕れ人と云連ける
アナと云侍女日延と乳ひ京都ニ到ヒ奏国塔ヒ一ヒ離散と驚
て生贄お侍と也又遠曲ニあるヒ生贄ハ京都より関東ニ下る云その
娘と生贄ニ有ふれ皮と源ヒたる色ニいつの神ヲの事ハ別也ヒの
生贄と云皮若ハ法別ニ間あり事也と云ヒ予ガ郷里の近邑ニ設
井村兎見の社祭礼ニ毎年十二月と就ハ兎も左ヒの生贄の
送ル也と云今殉死生概ヒの事制禁と成お止実ニ万代の仁政也

義経和尚問答のくだくだとうんて

誰もみな我身とはたてもつ一一表おもてとおもひこんでおや

○支那八朗の十八世福王と号し八さ山対鑑親の王清朗の王と唐ふ一

国と奪ひ北京に移て国号を大清と改め元と順治と号し清皇

帝と称せんとするも京と攻落し法氏の賢聖と利用し京の

風俗となり国性爺朗の祚と復興せんと軍士と募屠金銭

和の方法元年国性爺日本に援兵を乞申年代に応じ

陸に性爺敗北し塔伽に渡り紅毛の地と侵し思明州に城を

築き長崎日本寛文元年に和を通る

○寛永年中紅毛の国浦の南人竹内長左衛門二艘同国国姓

和一艘にて二艘に人数五十八人乗り松前に行て蝦夷に渡り

日の浦に着く浦人弓とそ日本人と討殺し彼十六人助命し

も京に着く　京養秋の時日本に帰て京城の周世に行て十七里あり云云

清皇帝も京より北京に移る　北京京城より六十五里に

方程を清帝日本人と懇親せしを長崎と聞て労を慰

後之に北京に移く遠西北京は清帝あり移居有

てより法氏の賢聖と利用し一寸四方程を孔子

とれとこの小紙に掛上げ不制下げ制事の中女賢と

言中より西方分顱巻の中に引色法中也中職九小の

華部と被て義八当と云方不指職分の拒なる故と勝に捉て

往来せしとぞ又漢人などハ ワンストウキウワンスホウワンスナト呼ぶ又韃靼と大明との國界に八百廿十二ゑ間の築地ありて其長サ支那道一万余里あり又北京南京の間ハ経凡二十日程ハ往来に邑郡て日本の者共羽黒(?)に漂ひと聞ゆるによりて北京より十人余も添奉(?)十五日出船し同十二月九日朝鮮へ着され今朝鮮に暫く逗留し朝鮮より又人数を添て長崎へ渡されしとぞ

○三州弘願山善門寺ハ石原の真言宗にて昔信心の宗丈塗(?)そ渡大夫昔朝江の仙文化積上人信職の時朝江に蛇が小池に逆滴りて文覚上人朝江と勧め平家追討の院宣を申し請人とて豆州を立至日三州まで来て善門寺に止宿ス夜至日寄

によりて逗留ハ暮るに南山ハ地下岩石にて井を掘る事かなはず水不自由也文覚上人此事を聞て不動尊の胎と懇ろに祈られしハ清水忽に湧出しハ文覚上人初の水とて今寺中に用ゆとハ此時文覚上人ハ雲岩と発し其日京に上りて院宣を戴き文京より今雲今まで来一宿ハ此時文覚上人化積へ平家調伏の祈を頼むによりて上人逗留朔の丈に不動の像を彫刻せらる此不動像今猶寺の護摩堂にありすなる像是也 豆州より雲なく京すて凡は五十余里京へ凡より京へ返るまで六里余ありし故と一日つ三州まで来りしと云ふ事のよし逗留と云ふ

○三州恩海西瑞寺山総持寺ハ此寺にて平氏石石の傍に一日縁者頂経院の姫宮に二條の蓄生畜生の妖狐隠れに此間何某鳴狐と見妖狐と逃しむ聞て其者として畜生の池と此間の小池に逐

お開帳一寺と建立し又六十俵別宮地の古と集め山と築き
稲荷の祠と建て今南寺境内ふかく稲荷の祠是也
同じ別宮根所大洞弁天の山湖水と眼下ふ直下絶景の地也
さ弁天の社地も法弘寺山猪地の古と称して築きたりし也
○浮田中納言秀家法名宗山猪地の古と称して築きたりし也
小妖狐托て祥くの吉と云せども不退転之秀家もん氣樂
して出仕とも歩行たると秀長ハ波娘と城へ紀長遠ふすす
退と旨命あるとも狐忍退きあるとも時ふ皮野狐退く時間
我連弱の罪小きとも退くまとも退くひふ秀長の命を
背くべ法大名ふ今一西ふ野の狐と将軍ぢんとの仲と密

たるる故今退くとの也我思ふ多の野狐の命と古ん事めと
もまでできぶ故也と云て演法しとたまりて翌日秀家礼
例として出城しを嫁と云上ハ秀長領て激矢せ所也
○新参敏の術ハ多別所清の法版藤山城守家史乃也威ようう
世ふ伝むを後下法番夜塚京本伝ふ新曲流と云芸別殺
香と藤流と云上鼎法物寺と新藤流と云むう方別ハ戸
流法是羽と云敏術者あること弟子ふ古子泥こ勝是ふ鎧
根岩兎角として三人あり時ふ源の一羽を病ふ罹るとて小鎧
と泥こ流ふ古人看病して未朝まて居添ひわやして寛角古人
源の病氣と戸ん推ハ戸ハ出撥蘆流と云付弟子教古人ハ

流れの小船もとまて甚急怒しが出んとせしが人々皮
と解て法人の胡いうぐやかて寵と撫小熊電小あるを見
出るれとさしくふえい

長法寺の人殺の場員と交し師弟之約と可成
文孫二年丙申　日中蒙雷小熊

兎角すてまはしてる孔と見て師小さ者と勝負と争む因て出り
物て小者て法小熊ら方小中達一日と定め相上小於て安寧ふ
双方本力とて秘術とて一撫力せ一ふ小熊て兎角を相
拔、押つ者所をとられて河へ投へし兎角甚面目一はら
上ゆとも小逐電とも也

○芸者の仕方おの小馬術の達人の子孫育国と名て名と家
称と云山去家小居なりうと通る馬の足音と聞て其蹄
立曲老馬と間て思ふおも不差馬と極れい毛色も知れると云
○菲花軒肯拍村上帝の皇子親王の流れて夫り其
と宗旨より代くしる歌道の達人なり月牡丹花と称を今流
とて牛の角と生て蹄之法事ふんる者怪笑へ不接
池田小者と俗ひ家者と号仕海龍花と植て嬉とん性海と
み者と也花と保て之也とん
○坂上平次郎源小恨のて越後と退治と廻て之昵
後の熊本小移るか義法度が武名と中興と成

手柄いう程のもの無きやうなれども、その後親戚ゆかりの家臣と共に
用意とゆうて、むかしの長子が新出にて、底と同じ手柄白拍
子を拵へ、家柄の高き人や高貴の方を招き、大酒の宴あり、
人と云へむ面白き拵技抜群と、上吏の軍技あるべし、
八軍場に於て大将の首一ツ斬るべし、大将の首一ツ
斬るべし、八千石の軍代官御洋諸侯の人も奉度仕度
と、仕度に成て、紅清正達、北清正悦、在不斜の速人
技抜群にて、抱の時に朝鮮軍師、平清正清正浪人明
将の首二級と、打取て、平右衛門の軍功二ツ斬、会子長左衛門
○朝鮮軍の時加藤清正軍と戦ん、と、敵の城と、淮陽と、攻

むる林集人、遠の未対に、あるべしと、思敵の城小命りて、
陣取て、千歩、敵、城、支清正、潤、同今見敵の城と命せる
時、長崎公、近付、清正、来、其の集人、小命、ゆり、長崎、不審也、と、
と云、と、敵、ばいけ上、勅仕も、皇恩、申、長崎、御賜、と、の、と、云、清正
笑て、四千方、長崎、八集人、小十倍、せり、今日、退、敵、来、八千、方
勇武、あり、長崎、推、出、し、千、時、公、笑、あり、ん、集、小、敵、一、戦、少、
の勇、あり、長崎、清正、小、命、ず、あり、也、千、来、ふ、ん、て、も、ふ、八、の、役、に、
言、くらる、後、長、夫、ゆ、て、感、ぜ、ず、と、
○車長、打、と、云、共、長、ゆ、て、紙、ゆ、て、人、ゆ、ひ、た、ゆ、ら、ぶ、出、の、に、
し、打、と、実、さ、あ、ら、く、な、性、と、塞、き、方、の、場、と、ゆ、ら、ん、今、

用ゆる方法は先づ絹屋町にて七と云ふ方法にて車長持と称
する物を買取て宿中へ持て来て所ふにこまるとて七ら辰小次の
弟なるもの云て田舎者勧誘人孫集る事二三度わり張之て七郎
内の役長級成庶と云ふ者に長く一緒の家へ持ち
歌分子家小金子堀をあつと言ふる事わり也拾ひとも子立
江と言ふなる方捜ひ求ふ修学子歩るあ子近所小唾のまあ
し見て七ら家小来混と技車長持と拾ひ先ふん訓ひあ孫
来ふ方て拾ひ方ふんと言ひ形る様小舟の事九七不審小
言ひ技ち持る文子法ひ子法ひ子ふ出せとて内ふて子ふ行ふと
運ひ出せど庵板動りふ〳〵子〳〵庵とふれ二子庵小して

子子下小法子〳〵あるを用て子庵板とふれて子下小割と各
ら〳〵垂りかふ〳〵ふれど云長小割ふて七百あり文ふり七家小
技長持と買たる方花町行先日見小て買たる車長持を法方
買たる中〳〵ふれ小彼要を大小不異新小て子長持小法方の
言ふ持来と我小買子て子ふる子方〳〵壹子〳〵分日数ふ
ど〳〵氣小入れ子ふ子ふ小雑〳〵精粗小ふ拾ふ内小
入れふれふり七い宿小海子所内の役人小妻田沼〳〵小所役の方
法日言ふ子義物ふれ〳〵和〳〵子ふ拾ふ〳〵子方法小ふる〳〵
の文小ふて七七係小福祐と〳〵ふる〳〵と先小絹屋町の辰小次
の弟と云ふ〳〵大全の精ふる〳〵風流也

○先年長田村より豊川村の民人、水を貪り渡せし書法の附帳出したる後、二十貫余法支那の古銭也、同去延享二巳年、宝永二巳年、別田原限赤根村祢宜の社地ゆえ堀出し、法用銭三十九貫四百五文あり、孰も亀の古銭なり

○去る宝暦三酉年、法用あつて出府の附願く、嘉永男爵、法用、と云渡ゆえ大変と紛ゆえ、実上を教さんとせし、杉山清里の老義、ひそかに手紙を渡せり、文ゆえ、取出、取寄の夢ゆえ、くゆ、人金せらるべしとのこと、数御ゆえ、告て曰、面邑の中、石村と云、石の傍、涙ゆえ、銭を手上、拾ゆ、懐ゆ、なるべし、捨て拾ひ、べしとも、取、夢の、あり、国、て、法、老義、中

石村ゆえ、石と、穿みも、法、銭、万、も、れ、を、と、捨、ひ、れ、
手、手、の、者、も、同、く、捨、ひ、所、を、と、即、法、を、校、家、う、法、云、渡、法、
ゆえ、て、授、る、物、る、れ、所、人、捨、ひ、れ、る、要、有、命、ゆ、ゆ、法、て、
法、老義、を、人、て、拾、ひ、上、る、たり、と、ゆ、要、数、凡、数、石、要、ゆ、五、て、
と、国、法、に、申、し、手、渡、と、云、文、ら、ゆ、も、元、豊、通、宝、ゆ、
法、毛、家、の、事、洲、虚、法、
○宝永巳年大地震ゆえ、年、大、地、震、ゆ、て、を、別、今、切、波、海、荒、く、寄、て、
ゆ、法、来、歩、あ、て、法、西、の、法、法、法、法、人、件、来、て、波、海、せ、ん、と、云、人、今、日、
浪、荒、を、有、様、く、ゆ、ら、し、ん、ど、も、れ、確、て、聞、く、法、方、ゆ、く、船、と、
附、逆、浪、来、て、人、命、を、和、法、ゆ、ゆ、法、死、せ、ら、て、中、法、法、士、の、事、

一人有て經歩の方就る津村の浜ハ浪にて井上の肥合に新居宿の
役人に見とがめられ是ハ江戸に居宿駅御外にありて經也漂ふに死
生在其と謂る所に塚を遣の旅人多く坂部と誰か坂部
ハ御津宿に分御て入りしと洲浜松に出る所也御津の東に今に郷
入る所に楠の木として十四五抱ある楠の古木あり此木一本にて太さある
事なり此同坂をとる日々沢村と云に大木の楠ありしが是ハ十七抱
ありと云此今切の渡海中に乳柱と振し今海郷に於今ハ渡海の障
○鵜洲田見を所に鶺鴒石と云有是也予いまだ見ず人にはじ也磯に
ハ条請の附られバ此石にも鶺鴒下りとも云の七ツ宮あるに竹簀にて
勝掛あるし此所にて諷又ハ湯海深く香られハ其長部人あつまり遣

ておもしろく侍れハ其宿く所ハ皮竹簀の不計に出て此和の未たえ
て六句の首に此まれハ進合宿られバ将来にもかき届きなれども此
末まぐみさ不るそのなかつ有事きたる成たるずずなんとて
○浅まの俳士芭蕉行脚の時陸奥の浅香の沼にてハナカツミとはいふ事を
所の者に尋しに知る者なしそれより彼方此方尋求めけれどもしれずして
只カツミ〳〵と云て日を暮しけるとありハナカツミとは蒲黄也一名を
其蒲又ハ浜に蒲槌とも云花の上の黄粉を蒲黄と云て薬店に有之物也
○草木一物にて枝葉茎根名異にして切端文字も別なる物種々あり
○葦　初て生ると日葭　未秀と日蘆　成長なると日葦
○蓮ハ総名也　○花開を芙蕖　○根を藕　○葉を芰荷

・茎と茎　・蒼と蔵落　・実と苟　葉と荷皇

○沉香　水に入沉と上と沉と桟香浮と黄熟者と云

○肉桂　枝と桂枝　本の上の方と肉桂中程と官桂　根の方と肉桂　心と桂心　右五品各功能異也

以降不注教養

○京田町裏に長四郎と云角職の者あり一年病気にて二月腫物

ここ後鼓脹のごとくなりて不食事十有餘日在て眼にと塞ぐ云

脳絶て死に向と雖オ鼻息かすかに通ずるとして不葬其死と謂

所に三日に成て腹に入出て小便

湯と持て来れに入出て小便

書耳とに塩に浸せ絶くゆめ大根と併砒掛て此をよりて云書

あり死水と与書もけ麦大根と併砒掛と入

麦腐かすに中に入き小便細あ落ちて又にと寄た再たの

おとして晋也に見もけ小便細りとれ分腹中大小腫ると水と

浮出る事二升余て肉脹と寄ることの如性に亦一度とゆむけ

薬のとして特大れば亦黒き水浮と交下る事一升余程に入て

出る事幸ちのとく動て九日と強て病家と離ることれ分十余

存生て稲古の粉とをとでさ物取せ清小毒薬書とて薬とある

とい云也人に清とちる西瓜と大根の幸煎小て浮下し病状小平

癒せ南瓜に入古印命の意出の間の事と同小古印命源で四手中程

と肩ぶかりて中と安好と安堂のうもあ中のとくそ事のく
あるとうの地村茶店ぶ茶味と成ぶうけ合ふとうんて頭ぶ歌
ひとそ恵とそ行る中ぶ小さんぶうりいと伊勢子ぶ家孫を花ぶ有る
山清源院の石文死して十九日ぶ成て甦る人冥途の事と同ぶ石
文曰兵湖山のうぶ行って風呂の孫ぶ対するのく他ぶんくぶ石な
国で思之我若し川の湖水と成て大ぶ心目と悦ぶ拾ーう溺故
て不忘時く付て示教と強ぶ百年ぶ人ぶ恐ぶくぶ見なる
らとうるを皮長ぶ寿ぶんぶう新ぶ考ぶ変なるうしぶも孰も年寿
の事ぶて為て地獄天堂の事ぶ古往ぶ来るの目録ぶ蘇
息して地獄の事と語るーぶ人と惑を妖妄の説也

○去ル寛保一年尾州川海宿ト里次家八ッ云ル別墅素井氏ト
堀ト附ル事ぶ及て井中ぶ居ぶる井戸堀地中ぶ測ル居て財ぶ因
て又主人の井戸堀井中ぶ下ルとそれも門く測ル作て高ぶ附ぶ
関の元あって麻の濁ぶ教十為と素ぶ綱山ぶと結井中ぶ入ル
縄不義一変ぶ動て千丈も示ぶあのく井中ぶ測ル死傷方
なくぶ石屋ぶ行ぶの郎命あって行ぶ中の元教ぶ人集ル事ぶ井
戸を掘ぶり拵別て人ぶ人くも示ぶ死ぶ者方
古来ぶり蓋附彩井古井ぶ示ぶ人との様ぶあるぶ云ぶ蓋ぶ
の中の義気ぶあぶり行る也

○去田町の元禄年彩堀と云ぶ一宿と附子宿ぶ成ぶ河豚

と云て喰へ共毒氣小毒氣忽倒る
故に長田の云例山屋のあるとて喰て湯と云ふ者の人に逢
如今ちり老ふ河豚と喰ふ者に熟飯食する所芋粥の
と喰へ猶ふ猶ふ泥て吐逆するとうんうん袷吐まれ毒氣に解也
るのみ也其上不覺醒病不大食と云ふ河豚の毒と解する故萩
の芽海藻茄子紫蘇或ハ青海の彩とれふ振立云もよし云
梅雪餐の清小

春河生萩せオ　春岸飛揚花　河拙當此時　貴不数魚鰕

○平江府に去る方に菱麦切の食意小振て府千亭に出
切蒸海布と称する湯のおしなるに菱麦切と人と焼ふ

千菱麦切不蒸糊しまりて用ふ豆腐同菱麦切ハ庶屋にて調
ふるに湯を沸ハ菱麦切小蒸海布と同食する小宜しきと
又一所小て人泥鰌汁の上小鰻と喰て不殘腹脹中
あり鰻鱺小飛ふ様小ふ小ふ鰻小もあり
○温泉小法別小あれども中葉京都の医源法眼法印紙馬と最上
と称せり京都ハ勿論大内裏内中ハ御所ちと紙馬ハ八
湯の云ふ

○頭痛と悪ふる云ふ薬小験時を京都茅元院ハ祈祷
ミキ　ちらく
ちと死小ふ序浄の粥と拵ふ

○眼病の云ハ国新田源目病の地蔵

○歯の痛む者は沢加戸隠樫沢に行る　釈文影抄

○瘡腫と称し者は沢駒迄瘡寺稲荷に行る　手水漏れ出だんごと成も

此條病患と敷ひの神仏に祈加小所在牧蓼ば祈もそ人

の法ふよりて病を瘡腫不係案小ものは何ぞ悪敷あらんや

○市井に京都に流行る時は流行病の去

年疫病に流行る者と揚て毒の案切て服と去つ所小去機の

薬と与ふ小後去ふれと不服して見也の尿と混と去たる和

俗小ふて尿と已ひ敷盃飲て後を日行禁小薬て病新

小服きり只自る去後し事の所曰平常壮健なるとて

余程の祈ふれとふく与瘡せ〜ものと云は小揚ふ

去僕小後と者と小去去たる所俗れ小痛と正ノ毛上脚毛

て不愛此事を小揚元の大根麦也し治る後蜂の蜂小蜜

也ふる小芋畑小住き芋と拵て付あたるふ〜蜂の蜜

たふ小芋を拵ふるよ〜〜毛ふ〜ふ〜ふ〜ふ

○或小毛の菌小あふれ了解菜毛ふ〜ふ〜毒汁と与ふ

毒小毒と解一助命ふ〜ふ支那小て数人毛の菌と

食て皆毒小当て倒ふ〜ふ〜あふて毒汁と与ふ〜ふ

熟も甘蘇ふ毛中日中相別の後一人死ふ〜も外と不解

ふ〜て不毀毒小物抜せ自立難廻小見ふ〜ふ生死の界

小効て小毒汁ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ

あるくらんだ清水下子の嘲八卑賤の縛光明墨をとるあり

光明寺書とのるべし

市井雜談集巻之下大尾

雜談集後編

近日出來

皆干寅暦十四申孟春

京洛書肆　寺町通二条下ル町　野田弥兵衛

二条通富小路西入町　野田藤八　梓

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan